

感染症定期報告感染症別文献一覧表(再生医療等製品2024/10/1~2025/3/31)

ID	感染症(PT)	出典	概要
1	ウイルス感染	N Engl J Med. 391(2024)821-831	<p>【背景】2019年6月、内モンゴルの湿地公園でダニに刺咬されたあとに発熱が続いた男性が受診し、その後多臓器機能不全をきたした。次世代シーケンシングを行ったところ、これまで知られていなかったオルソナイロウイルスへの感染が明らかになり、これをWetlandウイルス(WELV)と名付けた。</p> <p>【方法】ダニ刺咬歴のある発熱患者におけるWELV感染の有病率を明らかにするため、病院ベースの積極的サーベイランスを実施した。疫学調査も行った。ウイルスを分離し、動物モデルにおいて感染力と病原性を調べた。</p> <p>【結果】WELVは、ナイロウイルス科のオルソナイロウイルス属に属し、ダニ媒介性のHazaraオルソナイロウイルス遺伝子群ともっとも近い関係にある。逆転写酵素PCR法により、中国の内モンゴル、黒竜江、吉林、遼寧の患者17例で急性WELV感染が同定された。これらの患者の主訴は、発熱、浮動性めまい、頭痛、倦怠感、筋肉痛、関節痛、背部痛等の非特異的症候であり、より頻度は低い点状出血と局所リンパ節腫脹も認められた。1例には神経症候があった。頻度の高い臨床検査所見は、白血球減少、血小板減少、Dダイマー高値、乳酸脱水素酵素高値であった。8例から得られた回復期検体の血清学的評価では、WELV特異的抗体価が急性期検体の4倍であった。中国北東部で採取したダニ5種と、ヒツジ、ウマ、ブタ、ヒガシモグラナズミの検体から、WELV RNAが検出された。発端患者とダニから分離されたウイルスは、ヒト臍帯静脈内皮細胞において細胞変性効果を示した。BALB/cマウス、C57BL/6マウス、昆明マウスでは、ウイルスを腹腔内に注入すると致死感染を起こした。イスカチマダニが、卵巣からWELVを伝播させられるベクターの可能性はある。</p> <p>【結論】新規のオルソナイロウイルスが同定され、中国北東部におけるヒトの熱性疾患と関連していることが示された。</p>
2	ウイルス感染	WHO ホームページ. <a href="https://www.who.int/news/item/14-08-2024-who-director-general-declares-mpox-outbreak-a-public-health-emergency-of-international-concern">https://www.who.int/news/item/14-08-2024-who-director-general-declares-mpox-outbreak-a-public-health-emergency-of-international-concern</a>	<p>WHO事務局長は、コンゴ民主共和国(DRC)及びアフリカのますます多くの国におけるエムボックスの急増が、国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態(PHEIC)に該当すると判断した。このPHEICの決定は、エムボックスに関連し過去2年間で2度目である。DRCでは10年以上にわたりエムボックスが報告されており、その期間に毎年報告される症例数は着実に増加した。2023年には、報告された症例が大幅に増加し、2024年のこれまでに報告された症例数(症例15,600例超、死亡537例)はすでに2023年の総数を超えた。過去1カ月間に、DRCに隣接する、以前はエムボックスが報告されていなかった4カ国(ブルンジ、ケニア、ルワンダ、ウガンダ)において、100例以上のクレード1bの検査確定例が報告されたこと等について記載。</p>
3	オロプーシェ熱	ProMED-mail 20240727.8717780	<p>ブラジルはオロプーシェ熱による世界で初めての死亡を確認したと、同国のHealth Ministryが2024年7月25日に述べた。State of Bahia北東部に住む30歳未満の女性2例が、本ウイルス性疾患の最初の犠牲者となったと、同ministryが声明で述べた。当局は、Santa Catarinaにおけるオロプーシェ熱による死亡が疑われる新たな症例と、胎児2例の死亡を引き起こした母親から児への垂直感染の可能性例6例について調査している。同国は、2024年の現在までに7236例の症例を登録したと、同ministryが述べたこと等について記載。</p>
4	コリネバクテリウム感染	第98回日本感染症学会学術講演会・第72回日本化学療法学会総会合同学会(2024/06/27-2024/06/29)P-264	<p>【症例】44歳男性。中枢神経原発低悪性度B細胞リンパ腫で当院脳神経内科に外来通院していた。間代性痙攣が出現したため緊急入院となった。原病に伴う症候性てんかんとして抗てんかん薬を開始し、経過観察を行った。第4病日、39.7°Cの発熱が出現したため、CVポート感染を疑いバンコマイシン(VCM)を開始した。第11病日、CVポート抜去術を施行した。第13病日、<i>Corynebacterium provencense</i> 及び感受性の異なる別種の <i>Corynebacterium</i> 属を血液培養複数セットから認めた。抗菌薬適正使用支援チームからVCMでの治療継続及びCVポート抜去から14日間の治療期間を提案した。第24病日にVCMを終了し、第47病日に自宅退院となった。</p> <p>【考察】<i>Corynebacterium</i> 属は菌種によって感受性が異なるため、感受性試験を参考にした抗菌薬選択が必要とされるが、VCMが治療に必要となることが多い。<i>C. provencense</i> はヒトへの感染が報告されていなかったが、<i>Corynebacterium</i> 属に関する既報を参考に、CVポート抜去及びVCM投与にて治療可能であった。</p>

ID	感染症(PT)	出典	概要
5	敗血症性ショック	日本輸血細胞治療学会誌. 70(2024)447-451	患者は43歳女性で急性リンパ性白血病に対して臍帯血移植が施行され、連日赤血球・血小板輸血が行われていた。移植後Day29の血小板輸血では製剤の外観に問題はなくスワーリングも保たれていたが、輸血開始15分後に血圧低下、動脈血酸素飽和度低下、発熱、悪寒・戦慄が出現し、輸血を中止した。アナフィラキシーショックを疑いヒドロコルチゾン・エピネフリン・グルカゴンを投与したが、発熱も認められたため、敗血症性ショックの可能性を考え血液培養を実施した。患者血液と輸血バッグの残余血小板製剤の培養同定検査で血清型・菌種・泳動パターンが一致した大腸菌が同定された。また、輸血バッグの残余検体のエンドトキシン濃度は2,000 pg/ml以上であった。以上より、血小板製剤を汚染した大腸菌から産生されたエンドトキシンによりショックを引き起こしたと結論付けた。
6	真菌感染	ProMED-mail 20240722.8717692	中国で、これまで認められたことのない、ヒトに感染する真菌が検出された。60代と80代の2例の男性が、 <i>Rhodosporidiobolus fluvialis</i> と呼ばれる病原体に感染して既に死亡しているが、この真菌がこれらの死亡の原因となったか否かは不明である。この真菌は、2009年～2019年に中国の病院で治療を受けた数万例の患者から採取したサンプルに関する調査の一環で検出された。これまでヒトにおいて記録されたことのない新たな種は、 <i>R. fluvialis</i> のみであった。免疫不全のマウスに行われた実験では、 <i>R. fluvialis</i> が急速に変異して、「高病原性変異株」が形成されることが示されたこと等について記載。
7	細菌感染	第98回日本感染症学会学術講演会・第72回日本化学療法学会総会合同学会(2024/06/27-2024/06/29)O-121	【症例】63歳男性。飼いネコに指を咬まれ発赤腫脹が出現、近医にてセファゾリン、バンコマイシンを点滴するも効果なく当科に紹介された。診察時、右第Ⅲ指の発赤腫脹が顕著、PIP関節に創痕あり排膿も認められた。細菌培養を提出しアンピシリン/スルバクタムの点滴を施行。アモキシシリン/クラバン酸カリウムとアモキシシリンの内服を開始した。初診3日後、右上肢にリンパ管炎の所見あり。初診2週間後、臨床的に改善が遷延しておりX-pを施行したところ、右Ⅲ指PIP関節の脱臼と基節骨～中節骨の溶骨性変化を認めた。骨搔爬と関節固定を実施。抗菌薬内服は約6週間で終了。スプリント装着して通院リハビリを継続している。培養からは <i>Capnocytophaga</i> 属、 <i>Pasteurellamultocida</i> を検出。 <i>Capnocytophaga</i> 属は16SrRNAシーケンス解析、 <i>gyrB</i> 遺伝子PCRより最終的に <i>Capnocytophaga felis</i> と同定した。薬剤感受性検査はEtestにてPCG 8、CVA/AMPC 0.125、CTRX 0.75、CFPM 0.19、MINO 0.5、CPFX 0.5、CLDM 0.016、GM>256 μg/mLであった。その後、飼いネコの口腔内からも16SrRNAシーケンス解析にて同菌種2種を同定した。 【考察】 <i>C. felis</i> は2020年に初めて報告された新菌種であるが、これまではネコ口腔内からの分離でありヒトへの病原性は不明であった。今回、免疫不全のない健康なヒトから分離された第一症例と考える。
8	鳥インフルエンザ	CDC MMWR. 73(2024)501-505	米国の乳牛における高病原性鳥インフルエンザ(HPAI) A(H5N1)ウイルスのアウトブレイクとヒトの症例2例の検出。 2024年4月1日、Texas Department of State Health Servicesは、酪農場の従業員1例が、感染の可能性が高い乳牛に接触した後に、HPAI A(H5N1)ウイルスの検査で陽性を示したと報告した。United States Department of Agriculture (USDA)は、その1週間前、複数州での乳牛におけるA(H5N1)ウイルスのアウトブレイクを報告していた。ヒトの生活圏やその周辺に住み、影響を受けた農場で死亡した飼いネコ、トリ、その他の動物にもA(H5N1)ウイルスが検出された。2024年5月22日時点で、乳牛又は感染したウシの乳に接触した農場従業員約350例がモニタリングを受けている。このようなモニタリングの取り組みによって、Michiganで結膜炎を呈した2例目のヒトのA(H5)症例が特定され、2024年5月22日に報告された。これらは、鳥インフルエンザAウイルスのウシからヒトへの感染が推定された最初の事例である。

ID	感染症(PT)	出典	概要
9	鳥インフルエンザ	CDC ホームページ. <a href="https://www.cdc.gov/bird-flu/spotlights/cdc-bird-flu-response.html">https://www.cdc.gov/bird-flu/spotlights/cdc-bird-flu-response.html</a>	2024年4月以降、米国疾病予防センター(CDC)は各州の公衆衛生局と協力し、米国で27人の鳥インフルエンザA(H5)ウイルス感染を確認している。これらの症例のうち9件はHPAI A(H5N1)ウイルスに感染した家禽との接触に関連しており、17件は病気又は感染した乳牛との接触に関連していた。これにはカリフォルニア州の13件が含まれ、そのうち7件は10月13日の週にCDCによって確認された。カリフォルニア州のすべての症例は、感染した農場の酪農従事者であった。その症状は軽度の結膜炎が主であり、入院した症例はなかった。カリフォルニア州13症例のうち、6例の遺伝子配列が解析され、すべてが家畜の乳牛に感染を引き起こしているウイルスと遺伝的に近縁であることが確認された。また、他の4例の解析によると、ヒトへの感染性又は伝染性の増大に関連するヘマグルチニンの変化は示されず、さらに、利用可能な治療方法に対する感受性の低下に関する変異もなかった。なお、CDCは13症例のうち9例の検体からウイルスの分離に成功し、抗原特性評価と抗ウイルス感受性試験が進行中である。CDCは、米国の乳牛、家禽、その他の動物におけるHPAI A(H5N1)ウイルスの複数州での発生によって引き起こされた公衆衛生上の課題への対応を継続しており、USDA、米国FDA、戦略的準備対応局、州の公衆衛生及び動物衛生当局、及びその他のパートナーと連携し、ワンヘルスアプローチを採用して対応している。また、HPAI A(H5N1)ウイルスによるヒトへの感染の予防、監視、公衆衛生調査に関する暫定的な勧告を发出しており、これらの推奨事項に従うことは、個人のリスクを軽減し、全体的な公衆衛生リスクを抑制するために重要である。現在までに、米国では鳥インフルエンザA(H5)ウイルスのヒトからヒトへの感染は確認されていないことから、CDCは一般市民への即時のリスクは低いと評価しているが、感染した動物に接触した人は感染リスクが高くなるとしている。そのため、CDCは米国の一般市民、特に農場労働者向けにHPAI A(H5N1)ウイルスに関する情報を提供するビデオを公開し、啓蒙活動を行うことで感染リスクのある人々への情報提供と予防策の周知を図っている。
10	B型肝炎	GOV.UK. <a href="https://www.gov.uk/government/publications/hepatitis-b-in-england/hepatitis-b-in-england-2024">https://www.gov.uk/government/publications/hepatitis-b-in-england/hepatitis-b-in-england-2024</a>	本報告書は、2022年末までのデータに基づきWHOのB型肝炎撲滅目標に向けたイングランドの進捗状況をまとめたものである。該当箇所の詳細は以下のとおりである。 1.7.Prevention of infection by ensuring safe blood supplies 献血者のスクリーニングではB型肝炎輸血感染を完全に予防することはできない。一般集団及びドナー集団におけるB型肝炎の発生率は低いことから、感染性の可能性があるウインドウ期の供血が検出されない可能性は100万分の1未満と推定されている。HBc抗体スクリーニング前のモデリング研究では、潜在的B型肝炎感染ドナーからの潜在的な感染性献血が年間13回以上検出されていないと推定された。1996年以降15例の受血者で11件のB型肝炎輸血感染インシデントが確認されたと報告されており、加えて4件のさらなる潜在的B型肝炎感染による推定インシデントがあったと報告された。
11	B型肝炎DNA測定陽性	厚生労働省. <a href="https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_48604.html">https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_48604.html</a>	血液製剤に関する医療機関からの感染症報告事例等について、令和6年6月から8月までの感染症報告事例として、輸血用血液製剤は14件、血漿分画製剤は4件であった。そのうち、輸血用血液製剤との因果関係が否定された報告が3件、血漿分画製剤との因果関係が否定された報告は0件であった。輸血用血液製剤による病原体感染症報告事例の内訳は、HBV感染が5件、HCV感染が2件、HIV感染が0件、その他が4件で、そのうちサイトメガロウイルス感染が1件、細菌感染等が3件であった。HBV感染報告事例について、輸血後に抗体検査等が陽性であった事例は5例、そのうち献血者の保管検体の個別核酸増幅検査(NAT)陽性の事例は0件、劇症化又は輸血後に死亡したとの報告を受けた事例は0件だった。HCV感染報告事例については、輸血後に抗体検査が陽性であった事例は2件、そのうち献血者の保管検体の個別NAT陽性の事例は0件、劇症化又は輸血後に死亡したとの報告を受けた事例は0件であった。その他の感染症報告事例、B型肝炎及びC型肝炎以外の肝炎ウイルス感染報告事例については0件、サイトメガロウイルス感染が1件、細菌等感染報告事例において、当該輸血用血液の使用済みバッグを用いた無菌試験が陽性の事例は0件、そのうち輸血後に死亡したとの報告を受けた事例は0件だった。HBV感染のうち1例に関して、患者は70歳の男性で、投与前はHBV未感染だったが受血後の検査で抗体検査が陽性となった症例。献血者の2024年3月のHBV関連検査は陰性で、2024年7月の献血時のスクリーニングNAT検査で陽性、二次検査のHBV-NAT検査では陰性であった。スクリーニングNAT陽転献血時の検体でウイルス同源性確認を実施したところ、献血者と受血者の検査した範囲ですべて一致し、献血者株及び患者株のHBVがGenotype Cの結果であることが確認されたため、輸血による感染とみられた。

ID	感染症(PT)	出典	概要
12	B型肝炎DNA測定陽性	日本輸血細胞治療学会誌. 70(2024)27-32	<p>患者は65歳男性で、白血球増多・貧血・血小板減少を契機に入院、急性骨髄性白血病の診断となった。輸血前のHBs抗原・HBs抗体・HBc抗体は陰性だった。入院後第3病日に、4価NATの陰性を確認し、血小板製剤が輸血された。献血者が2週間後の再献血時にNAT陽性となり、HBV DNAが検査されたが陰性であり、本患者の遡及調査にいたらなかった。約1カ月後の再献血時に献血者のHBV DNA陽性が判明したため、輸血によるHBV感染の可能性があり本患者は遡及調査の対象となった。輸血後6カ月後の第149病日にHBs抗原、HBV DNA陽性となり、患者と献血者検体HBVのDNA延期配列が一致し輸血による感染が確定した。エンテカビルによる治療をおこないHBV DNAは陰性化し急性肝炎は発症していない。</p> <p>当該HBV感染症例についての当局の薬事審議会血液事業部会資料血液製剤に関する医療機関からの感染症報告事例等について、令和5年12月から令和6年2月までの感染症報告事例として、輸血用血液製剤(人赤血球液又は人血小板濃厚液)は8件、血漿分画製剤(乾燥濃縮人血液凝固第8因子又は乾燥ポリエチレングリコール処理人免疫グロブリン)は2件であった。そのうち、輸血用血液製剤との因果関係が否定された報告が3件、血漿分画製剤との因果関係が否定された報告は0件であった。輸血用血液製剤による病原体感染症報告事例の内訳は、HBV感染が1件、その他細菌等が4件であった。</p>
13	B型肝炎DNA測定陽性	血液事業. 47(2024)499-499	<p>本報告は速やかな受血者情報の収集と調査報告により、輸血後HBVに感染した受血者の早期治療につながった事例報告である。受血者は70代女性、原疾患は直腸癌。2023年4月27日に腫瘍出血のためr-RBC-LR-2(2023年4月16日採血)を輸血した。当該献血者は2023年6月11日の献血時、個別NATでHBV DNAが陽転化したため遡及調査の対象となった。当該製剤の個別NATは陰性であったが、本事例は感染のリスクが高いと判断されたため、安全管理部門の指示により、医療機関に速やかに情報提供を行うとともに、協力を得て受血者検体入手し日本赤十字社中央血液研究所でHBV関連検査を実施した。受血者の輸血前検体はすべての項目が陰性であったが、輸血から2カ月後の検体(2023年6月28日採血)において、HBV DNAが陽性であった。また、献血者のHBV株と受血者の輸血後検体から検出されたHBV株との同一性を確認した結果、両者のHBV塩基配列はすべて一致しており、HBVジェノタイプはI(Cの亜型)であった。感染が判明した当初、担当医はインターフェロン治療を行う方針であったが、ジェノタイプ判明後、核酸アナログ治療に方針を切り替えた。その後受血者は7月26日にHBs抗原が陽性となったが、輸血後B型肝炎急性肝炎は発症していない。受血者は輸血した血液製剤に存在していた検出限界未満のHBVによって感染した可能性が高いと考えられた。また、本事例は個別NATスクリーニング開始後、本邦初のRBCによる感染症特定症例であった。遡及調査の情報提供時、当該医療機関では受血者の輸血後感染症検査は未実施であったため、速やかに患者のフォローを行ったことが、感染初期からの治療開始につながり、結果的に肝炎の発症を回避していると考えられる。</p>
14	HIV感染	IASR. 45(2024)159-172	<p>本件は厚生労働省エイズ動向委員会:令和5(2023)年エイズ発生動向年報に基づいている。新たにHIV感染症と診断され、届出された者は、HIV感染者とAIDS患者に分類される。1985~2023年の累積報告数(凝固因子製剤による感染例を除く)は、HIV感染者24532(男性21898、女性2634)、AIDS患者10849(男性9940、女性909)である。本邦の2023年の新規報告数は、HIV感染者669(男性649、女性20)、AIDS患者291(男性282、女性9)であった。HIV感染者新規報告において、静注薬物使用は2件あった。</p>